たくみ

TAKUMI

No.036
平成27年6月●夏号
信州名匠会

（題字：故　池田三四郎　前名誉会長）

平成26年度研修旅行　東京―新旧名建築を体感する旅

東京木材会館・江戸東京建物園 他を見学

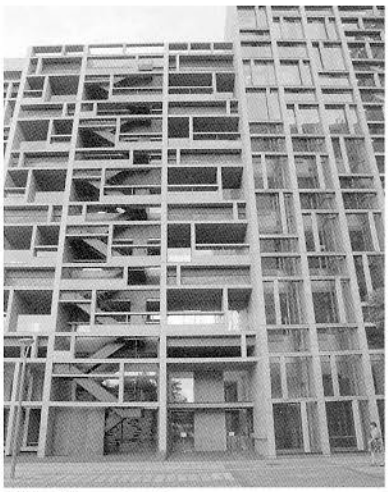
信州名匠会　平成26年度研修旅行は、10月25日･26日に20名が参加して行われた。今回は、何かと行く機会が多い東京。さすがに日本の中心、郊外も含め、まだまだ観るべきものがたくさんあることを実感した。越中五箇山の合掌造りの建物等を移築し広大な庭園と、日本の伝統建築の心地良さを味わうことができる「うかい鳥山」。アーチ壁による自然との繋がりが心地よい斬新な建築「多摩美術大学　八王子図書館」。木材の新しい可能性を感ずる「木材会館」。前川國男邸等、貴重な建物が体感できる「江戸東京たてもの園」。そして、青梅の自然の中に佇む「川合玉堂美術館」と、新旧さまざまな建築のすばらしさ･魅力を再認識した。

うかい鳥山にて

都市部大型建築での木材使用の可能性を感じる、洗練された空間を堪能

木材会館は、東京木材問屋協同組合百周年記念事業として、木材流通の中心地である新木場に計画された。木材需要の低迷する現在、都市部の建築において、いかに木材を使って安らぎを感じる魅力的な空間を作るか、地球環境に貢献できる建築が出来るかを探究したプロジェクトだ。

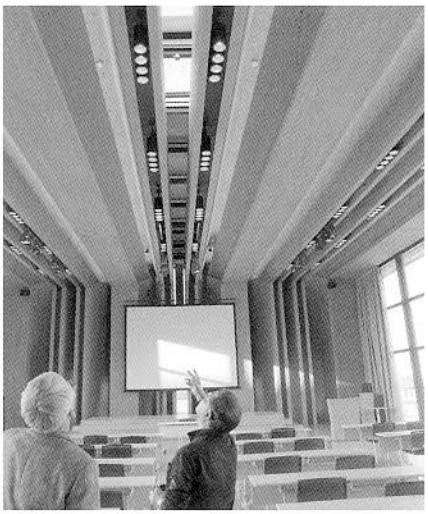
東京木材問屋協同組合事務局長の中原氏の案内で、7階ホールから1階和室まで館全体を見学させていただいた。7階のホールは、30m近いスパンをコンピューター制御のNC加工で伝統の「追掛大栓継手」を施し、カシの木栓をはめ込んで繋がれ組み上げられた檜の12㎝角で組まれた大梁を架け渡している。耐火構造が要求される大規模な建物で、可燃物である木材を構造体として使用するため、実際に火災が発生した際に火がホールの天井に届かないか、火の熱や煙で木梁に火がつかないか、といったあらゆるケースを計算して検証し防災の専門家の評定をとって実現している。



木材会館ファサード

木梁と木梁の間に設けられた天窓から光が降り注ぎ、ホールと木梁を柔らかく照らし、心地よい空間となっている。6階の小ホール･会議室、2階役員会議室、1階エントランスホール･ギャラリー･和室･茶室等、さまざまのところで、多くの木材が使われ、斬新なデザインが施されている。これも、内装制限を、避難安全検証法で安全性を検証して実現している。

また、外部は外壁が炎上した場合でも上階に燃え広がることがないような構造とし、これも評定を受け木材を使用。広場に相対する西面には、鉄筋コンクリート柱と木格子とで外部環境に対するバッファーゾーンを計画。都市生活の中に「木と暮らす」現代の縁側空間をもたらしている。



木材会館７階ホール　12㎝角の檜材で組まれた大梁

研修旅行スナップ

早朝に長野を発ち、「うかい鳥山」に到着。奥高尾の山里に合掌造りの集落。なつかしい日本の情景がそこに拡がる。ゆっくりと日々の喧騒を忘れ庭園を散策、炭火焼き料理を満喫した。その後「多摩美術大学　八王子図書館」「木材会館」を見学。　二日目午前中、7haの敷地に現地保存が不可能な文化的価値の高い歴史的建造物を移築し、復元・保存・展示している「江戸東京たてもの園」を見学。前川國男邸は、太平洋戦争開戦の翌年建てられたという時代背景を反映し、壁は黒く塗られ、瓦屋根を載せた和風のデザインだが、建築空間からディティールに至るまで、木造モダニズムの原点となる貴重な建物を体感できた。

多摩美術大学八王子図書館にて

中島健・古田五十八 作庭　川合玉堂美術館

江戸東京建物園　前川國男邸前にて

研修旅行日程

10月25日(土)　須坂(㈱山二駐車場) ――松本インター ――うかい鳥山 ―― 多摩美術大学 八王子図書館 ―― 東京木材会館――シーサイドホテル芝弥生(泊)

10月26日(日)　江戸東京たてもの園 ―― 川合玉堂美術館 ―― 松本インター ―― 須坂

平成26年度研修旅行「東京 新旧の建物を体感する旅」参加者名簿（20名。氏名・所属。順不同、敬称略）

五明良平・夫人（株）五明、坂田守夫・坂田工業（株）、田中謙一・（株）角藤、内山保・朝陽工芸（有）、水沢仁亮・夫人（株）二見屋、白石大陸・サンコー特機（株）、高梨廣男・（有）高梨建設、黒澤忠・クロサワメタル（株）、荒井孝明・（株）本久、高木茂実・松田・南信（株）、長澤和芳・長野建築情報サービス、手賀俊光・（株）降幡建築設計事務所、堀誠・堀光子・建築工房アカシア、中村光敬・（有）中村木工所、西澤広智・（株）宮本忠長建築設計事務所、中村明穂・宮本夏樹・事務局

会員の動向（平成26年6月～平成27年6月。順不同・敬称略）

○入会　個人会員　小坂浩一・小坂建設(株)・大工　長野市松代町松代1297-10　TEL. 026-278-8481／個人会員　堀内太一・(有)泉秀園・造園　千曲市大字桑原82番地1　TEL. 026-272-8072／個人会員　中沢清光・(有)エヌ・テック・測量　長野市稲田3丁目37番12号　TEL. 026-244-0699
○担当者の変更　賛助会員　田中謙一・(株)角藤・鉄骨加工(前任:長澤知芳)
○退会　賛助会員　荒井和夫・(株)荒井造園・造園賛助会員　小川明・建築工房 空・建築家
○逝去　顧問・個人会員　倉橋英太郎・(株)倉橋英太郎建築設計事務所・建築家

訃報　(株)倉橋英太郎建築設計事務所倉橋英太郎さん　ご逝去

信州名匠会の顧問で（株)倉橋英太郎建築設計事務所代表取締役所長の倉橋英太郎氏が、平成27年5月21日、ご逝去されました。享年65歳。氏は、旅館・ホテルを中心に、古い建物を蘇らせる「たくみ」として、テレビにも取り上げられる等、全国を飛び回り、精力的にご活躍していらっしゃいました。平成25年度信州名匠会の総会では、倉橋さんらしい「好い加減な匠」というユーモアある演題でご講演もいただきました。亡くなられる直前まで、地鎮祭に出られる等、普段と変わらない仕事をされていて、突如、硬膜下血腫に襲われました。バイタリティーあふれる元気なお姿が忘れられませんが、信州名匠会の活動にご尽力いただいたことに感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

平成25年6月の総会で講演される倉橋氏。

会員に聞く
「たくみの仕事」Vol.25

建物の声を心で聞く。曳家職人三代目。そして四代目の長男へ

有限会社 金田工業所 取締役社長　金田勝良氏（須坂市春木町）

profile●昭和20年7月28日、須坂市生まれ、69歳。社員5人。ご家族は夫人と2人暮らし。

「曳家は先を読む力と気が利くことが大切。長男や若い職人の成長が楽しみです。現場で技と心を伝えていきたい」

三代目として曳家（ひきや）の伝統を受け継ぎ、技術の高みを追いかけてきた。「一つとして同じ建物はない。自分で考え抜いて、納得いくようにやるのが曳家の心意気」ときっぱり。須坂市や上田市の繭蔵、松代の武家屋敷など文化財を含む歴史的建造物の曳家工事も数多く手がけ、北陸建築文化賞（2003年・日本建築学会北陸支部）、伝統的文化賞（2009年・日本建築士会連合会）といった華々しい賞に輝いたものもある。

小さなころから「お前は家業を継ぐんだよ」と言われ続けて育った。しかし、大学で建築を学んだ後は、都内の建設会社に就職。「（故郷に）帰るつもりは毛頭なかった」と笑いながら当時を思い出す。その後、神奈川県内の建設会社に転職、「偶然というのか、そこは曳家もやる会社だったんです」。「わりと大きな会社だったが、学生のころ帰省するたびに家業を手伝っていたせいか、生意気にも家（うち）のやり方のほうがレベルは高いなと感じていた」と言う。そんな思いも抱きながら働いていたところ、父が病を患い、運命に導かれるように帰郷、自然の流れで家業を切り回すようになった。

まだ子どものころ、初代の祖父が曳家職人として強烈な矜持を見せた出来事が、今も忘れられない。大きな地震があった後、工事の途中で井桁に組んだ枕木に建物を乗せた状態の現場の責任者が、現場を見ないうちに祖父のもとへ駆け込んできた。「きっと、もうだめだ（建物は倒れてしまっている）」と号泣していた。祖父は彼に、「うろたえるな。自分の仕事（技術）に自信を持て。ひとまず現場を確認して来い」と一喝。結局、その現場は何ともなく、工事は滞りなく終わった。誇り高い職人魂を目の当たりにした瞬間だった。

そんな祖父や父から受け継いだこだわりを自分なりに磨き上げてきた。「材木のきしみなど、建物は音を立てるんです。それは建物の気持ちとも言えるもの。建物の声を心で聞きながら、段取りして作業を進めます」と独特の言葉で曳家の真髄を語る。

最近、四代目の43歳の長男と「やり方などで衝突することが多いんです」と笑う。父に対して、自分なりのこだわりを譲れないのは「確かな成長の証」と目を細める。自身もかつて、まったく同じ経験をした。「ぶつかっても、その後の父からの言葉（アドバイス）に、ずいぶん助けられた。同じことを息子にしてやれれば」と穏やかな笑顔を見せた。（関卓実）

左から勝良さん、父で二代目の確二さん、長男で四代目の晃典さん、次男の敏弥さん。

会員に聞く
「たくみの仕事」Vol.26

木を愛する家具職人 技と工夫で顧客のイメージを形に

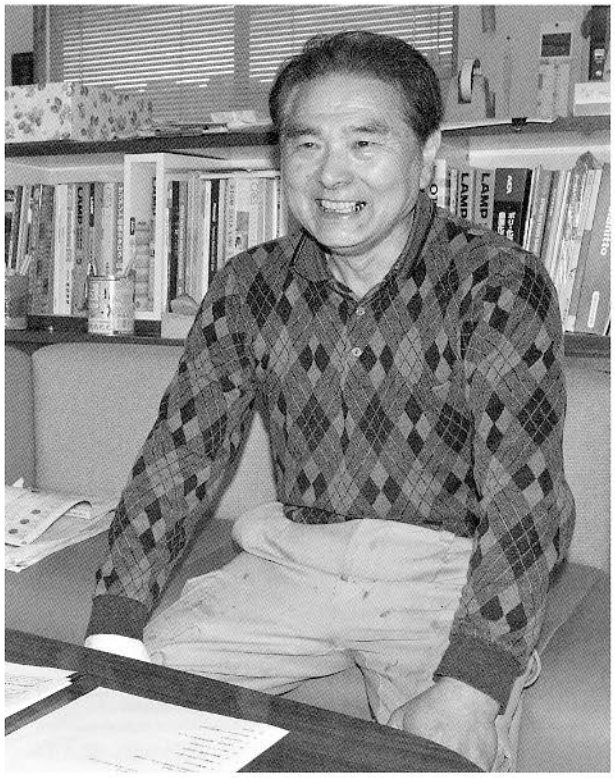
有限会社　朝陽工芸　代表取締役　内山保氏（長野市穂保）

profile●昭和23年12月6日、長野市（旧信州新町）生まれ、66歳。社員9人。ご家族は夫人と一男三女。

「家具職人は木が好きじゃなければだめ。加工するときに美しい木目が、さーっと現れる瞬間が魅力なんです」と語る。木の特徴や美しさを生かすのが職人の腕だ。さまざまな種類の木とつきあってきた。「狂いが大きいカラマツには手を焼きました」と笑いながら思い出す。「一番好きな木（材）は、やっぱりケヤキかな」

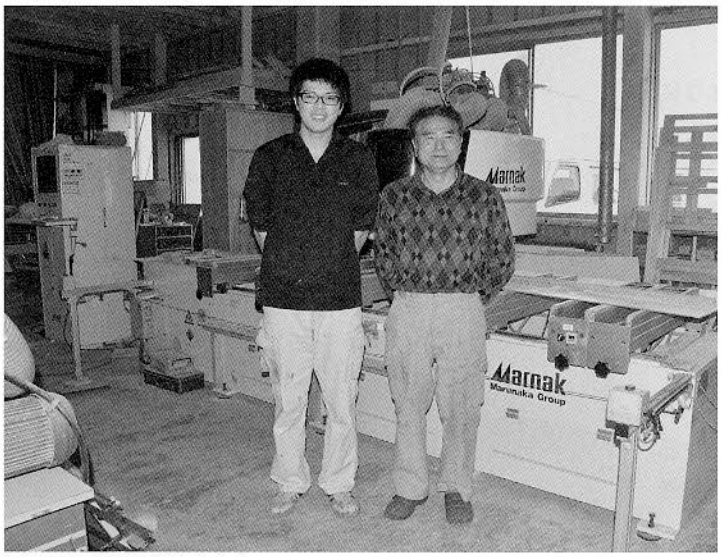
長野市内の老舗の木工店で丁稚奉公のような形で修行した。ミシンやギターなどの木製部品の加工を通じて繊細な技術を身につけた。その後、仲間の一人と独立。バブルがはじけた直後で、「商売の元になる木工機械を購入するのに苦労した」と振り返る。

手がけるのは、棚やカウンターなど建築の造り付け家具。創業30年の信用で、顧客の工務店や設計士らからお任せで仕事を頼まれることも多い。住宅の仕事を中心としながら、美術館や店舗、学校・図書館といった、さまざまな施設の仕事もこなす。最近では、茅野市の尖石縄文考古館で国宝「土偶」（縄文のビーナス・仮面の女神）の展示ケースをつくったのが印象深い。「楽しい仕事で、満足のいくものをつくることができた」と笑顔を見せる。新しい長野駅ビルでは、タリーズコーヒーのカウンターや棚などを、開店前に夜通しの突貫工事で仕上げた。



「私は物造り一筋です。何があっても、物造りを続けてきて良かったと思います」

仕事をする上で最も大切しているのはお客さんの想い。「家具は、いろいろ工夫できるところが面白くて、それによってお客さんが喜ぶ顔を見るのが何よりうれしい」。塗装によって古材の雰囲気を醸し出した家具には、蝶番を焼いてレトロ調にしたものを組み合わせるなど、妥協せず、こだわり抜く。自社の木工機械は、あらゆるカット（面取縁）やアールに対応可能だ。「お客さんや設計士さんのイメージを、そのまま形にしてあげたい」と職人気質がにじみ出る。そんな思いを込めて仕事に打ち込むだけに、最近は飛び込みの客にニトリのチラシを見せられて、「この価格でこんな感じのものをつくってもらえないか」と頼まれることもあり「ちょっと寂しさを感じてしまいますね」とつぶやく。



長男で二代目の挙太さんと。

いま社内には、後継者と期待する20代半ばの長男挙太（けんた）さんをあわせて3人の若者が働いている。「彼らを早く一人前にすることが自分の最大のテーマです」と力を込める。厳しい家具業界を技術で生き抜いていける職人に育て上げる覚悟だ。（関卓実）

定例研修会●Report

（平成26年10月～平成27年4月）

平成 26 年度第 4 回研修会
信州名匠会リレートーク VOL.5
【「木材のプロ」鎌倉氏が語る適材適所の使用を】

平成26年12月19日
プレゼンター：鎌倉　良収（(株)鎌倉材木店）
参加者：17名

図を描きながらわかりやすく解説する鎌倉氏

第５回リレートークは、鎌倉材木店（長野市）の鎌倉良収氏が「木材のプロ」として、木の種類や性質にあわせた使い方について語った。

鎌倉氏は、「ヒノキを梁に使うのは無理がある。総ヒノキの家といっても実は主に用いられるのは柱と土台」、「長野ではスギは、あまり梁には使わないが九州や愛知などでは普通に用いる」、「マツは成長が早く耐力が強い」など、木の種類や性質に応じた使い方を紹介。「見た目のデザインにとらわれず、材の特性を知り尽くした上で、プロとして適材適所の使用を心がけている」と、こだわりを語った。

良い木材を製造するために欠かせない丸太の目利きのポイントについても説明。市場では、木の筋肉のような「アテ」や「節」、「芯寄り」といった部分を注意深くチェックしながら丸太を仕入れていると説明した。

また、耐久性や狂いなど木材の品質を大きく左右する乾燥技術についても詳しく解説。自社では、豊富な樹種に対応できる蒸気式の乾燥機4基によって乾燥を行っているとしながら、「乾燥で一番大変なのは樹液を抜くこと」と話した。

平成２６年度　【新年会】

平成27年1月21日
ホテル犀北館
参加者　28名

毎年恒例となった信州名匠会新年会が犀北館で行われ、会員同士が親睦を図り一年の抱負を語りあった。土本会長は年頭のあいさつで、「文化財への貢献について考えていく必要がある。今後、異なる職種の経験談から信州の建築の技術を広めていきたい」と訴えられ、信州名匠会の今後の活動に期待すると語った。

降幡副会長は乾杯のあいさつで、「信州名匠会は創立して22年になる。22年歩んでこられたことが幸せであり、貴重な会である。末永く活動が続くことを期待する」と語り、和やかな懇親会が始まった。

昨年の地震で被災された小谷屋根の松澤氏からは災害時の話をお聞きした。災害後、松澤氏のTV特集が放送されたことも報告され、「特集を見た被災者に勇気を与えることができた。今後災害があった時は協力する」と力強く語った。

N設計の西澤氏、建築工房アカシアの堀氏は名匠会の今後の展望、若手の育成について語られ、新年にふさわしい期待あふれる明るい新年会となった。

平成 26 年度第 5 回研修会
信州名匠会リレートーク VOL.6
【瓦職人の西宮氏が語る。瓦は日本の美を体現】

平成27年2月25日
プレゼンター：西宮登喜男氏　（(株)綿内瓦工業）
参加者：18名

「姫路城大天守」保存修理工事の様子をＤＶＤ映像で紹介する西宮氏（右）。

第6回リレートークは、綿内瓦工業（長野市）会長で瓦職人の西宮登喜男氏が、瓦葺きの施工技術などについて語った。

はじめに西宮氏は自社が手掛ける瓦工事の種類について触れ、「一般住宅が60%を占め、社寺仏閣が25%ほど。残りの15%は（歴史的建築物などの）復元工事で、ここ数年で急に伸びている」と説明した。建物に風情を醸し出す「古い瓦」へのニーズは高く、自社では「平瓦2万5000枚、軒瓦700枚、熨斗（のし）瓦2000枚ほどをストックしている」と話した。

復元の事例として西宮氏は、奈良県の瓦製造・施工会社で修業中の息子が職人として携わった「姫路城大天守」保存修理工事の様子をDVD映像で紹介。築城から400年、昭和の大修理から50年を経て、平成21年10月から今年3月まで約5年半をかけて進む大事業。8万枚もの軒先瓦の詳細な調査（破損状況・寸法・製造年代）から始まる屋根の復元作業の様子を見た参加者からは、「すごい」「気が遠くなりそうだ」といった声があがっていた。

西宮氏は、神城断層地震の後に、自身が撮影した写真をもとに、長野市内の住宅の瓦（屋根）の被害についても解説。「15年以前の瓦は被害が出たものもあったが、（施工技術が改善された）それ以降のものは、ほとんど被害が出ていなかった」と説明した。西宮氏は、瓦葺きの施工技術が進化し標準化

が進んでいる業界の現状や、部分的な補修をしやすいといった瓦屋根の特徴を挙げながら、「日本の美を体現する瓦を、もっともっと使ってほしい」と訴えた。

平成 26 年度第 6 回研修会
信州名匠会リレートーク VOL.7
【茅葺き職人 松澤朋典さん語る。後世の見本となる仕事を残す】

平成27年3月25日
プレゼンター：松澤　朋典氏（小谷屋根）
参加者：23名

第7回リレートークは、茅葺き職人で小谷屋根（北安曇郡小谷村）社長の松澤朋典さんが話し手を務め、茅葺き屋根の現状や施工技術について語った。

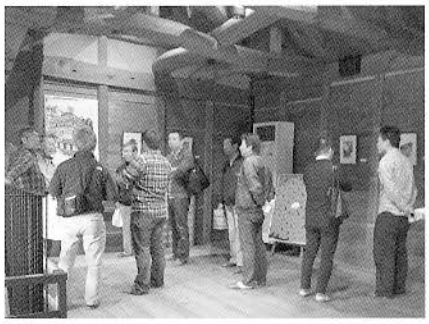
松澤さんは、棟梁として手掛けた安曇野市内にある築150年の民家の葺き替え作業の様子を、テレビ放送された際のDVD映像で紹介しながら解説。地元小谷村の茅場から集めた小茅（カリヤス）を束にして何層にも重ねて屋根の厚みを出していく葺き方を説明した。培った職人の技について「茅葺きの仕事は感覚が大切。仕上がりを常に頭でイメージしながら、目と手の感覚を頼りに葺いていく」と語った。

松澤さんは、小谷屋根の3代目で職人歴は10年。今も現役の職人として伊勢神宮の仕事などにも携わる父・敬夫さんから仕事を学んだ。「建物の顔とも言える軒のラインにはさみを入れるときが最も神経を使う」とし、「何十年か後の葺き替えで（屋根が）解体された時に、後世の見本となるような仕事を残したい」と職人としてのこだわりを語った。

松澤さんは、小谷村で「茅むじん」と呼ばれる住民同士の茅相互扶助の仕組みによって守られている「牧の入茅場」も紹介。文化財の保存に用いる資材を供給したり、関係する技能者を育成する役割を担う県内では唯一の「ふるさと文化財の森」の指定（文化庁）を受けるなどして、住民らが協力して行っている「野火付け」や「茅刈り」など季節ごとの茅場の作業を説明した。今後は、子どもたちの茅刈り体験など、茅葺きの技術と文化を守り、後世に伝えるためのPRにも力を注ぎたいと意欲を見せた。

平成 26 年度第 7 回 研修会
【松代の寺町商家見学、お花見、陶芸教室】

平成26年4月18日（土）
講師：西澤嘉雄氏（（有）エヌ設計所長）
参加者：16名



市の有形文化財「寺町商家（旧金箱家住宅）」を見学。

松代城跡にて昼食を兼ねたお花見を楽しんだ。

4月の研修会は、松代にて恒例の花見を兼ねた見学会・親睦会を行った。天気にも恵まれ、4月4日に保存修理工事を経て一般公開された市の有形文化財「寺町商家（旧金箱家住宅）」見学、松代城跡にて昼食を兼ねたお花見、その後に村越先生のご逝去後中断となっていた陶芸教室を「松代陶苑」にて行った。

最初に訪れた寺町商家（旧金箱家住宅）は、松代において江戸時代末期から昭和初期まで質屋等を営んでいた商家・金箱家の屋敷である。主屋や質蔵、離れ等の7棟からなる歴史的建造物群と、泉水路と池を中心とした庭園が現存しており松代における豊かな商家の暮らしぶりを伝える貴重な屋敷だ。

市が所有権を取得し整備することで貴重な建造物に再び命が吹き込まれ利用・公開されることとなった。中でも大空間の質蔵は十字に重ねた梁が特徴の独特な小屋組みで貴重なものであった。

古くて価値ある建物をこのような形で残していくことでさらに価値が高まると感じる。今後レストランやギャラリー、貸スペースとして積極的に観光スポットとして展開するようで注目したい。

桜吹雪の中で花見弁当を堪能した後は、松代陶苑に移動して陶芸教室を行った。村越先生へ思いを馳せながら各々1kgの粘土をもとに約2時間、皆集中し茶碗や湯飲みをはじめとした個性あふれる作品を製作。釉薬により松代焼独特の青緑の美しさをまとった作品が出来上がる1か月半後が楽しみである。

村越先生を偲んで松代陶苑にて陶芸教室を行った。

桜咲く初春の気持ちよい気候のなか松代を散策し、街の良さを再認識した。親睦を深めると共に気持ちもリフレッシュでき楽しい時間を過ごすことができた。

（宮本忠長建築設計事務所・野々山修一）

平成 26 年度第 2 回理事会

平成27年4月20日
宮本忠長建築設計事務所
出席者：11名

たくみ No.036 信州名匠会ニュース
発行日：平成27年6月25日
発行者：信州名匠会　会長　土本俊和
編集者：信州名匠会事務局
制作協力：文屋　木下豊
連絡先：（株）宮本忠長建築設計事務所
事務局：西澤広智・中村明穂・中山貴史・関卓実・吉田雅彦・木下豊
〒381-0012 長野市柳原 1875-1
TEL：026-241-5510 FAX：026-243-0187
http://www.meisyokai.com